



当時の米国三菱商事
機械部の部下たちに囲まれて
(1991年)

米国勤務時代の思い出



小島 順彦
三菱商事
取締役会長

1985年10月、2回目の任地米国ニューヨークへ赴任した。家内と娘二人を連れ、6年間の良い思い出となった。当時日本の経済は快調で、「ジャパンアズNo.1」とまで米国でいられていた。一方、米国経済は低調で、結果として当時の米国三菱商事も優秀な米国人社員をかなり採用できた。自分の担当していた機械部門でもハーバード大卒が1名、スタンフォード大卒が2名採用でき、本当に良くサポートしてもらえた。

実は私の最初の任地はサウジアラビア。1979年から2年間の単身赴任で、三菱商事の事務所ではなく、サウジアラビアの財閥の会社に派遣された。私は20数カ国の国籍の社員と働いた一人の日本人。社内公用語はまさに英語であった。従って毎日下手な英語でしっかり議論をせざるを得ず、大変良い経験になった。すなわち、英語は流暢に話すより、はっきり自分の意見を言うことが肝要であると学んだのである。そのおかげで、ニューヨークにおいて優秀な部下から素晴らしいレポートが上ってきて、下手な英語でしっかり自分の意見を部下に



米国三菱商事
機械部長時代の執務室(1989年)

伝え、思い通りのコミュニケーションを図ることができた。今でも時折米国へ出張する際、昔の連中と同窓会をやるのが楽しみである。

もう一つ米国の思い出としては、赴任直後にマンハッタンの郊外にある樹々に囲まれた町で家を購入し、素晴らしい緑の中で暮せたことである。米国で家を買う際に驚いたのは、売りに出ている家のかなりが、建ててから40～50年後のものであること。一戸建ての住宅価格は時間とともに必ず上がり、何年後かに売ると必ず売却益が得られるというのが当時の米国における不動産常識であった。

21世紀に入って米国にサブプライム・ローンが登場、その破綻が大きな問題となったわけだが、米国駐在の経験からすればそれは十分にあり得るなと納得する次第。金融技術が進んでいる米国は、現在まさに苦勞しているが、世界のために一刻も早く立ち直してほしい。